

主 題：神が望んでおられる生き方

聖書箇所：ペテロの手紙第一 1章13-21節

皆さんは、神様が与えてくださった時間を無駄にせず、毎日、有意義に生きておられますか？早いもので今年ももう3月になりました。私たちが覚えるべきことは、私たちの地上での生活が、確実に一日一日短くなっていっているということです。もしかすると、あなたに残された地上での時間は、あと1年かも知れません。いや、あと半年か、1ヶ月かも知れないのです。パウロは、いよいよ自分の人生の終わるその時が近づいたことを知って、Ⅱテモテ4：7で「**私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。**」と告白しましたがあなたはいかがですか？皆さんの生涯は「やるべきことはやった！もう悔いはない！」と言えるようなものでしょうか？何より、神様から「よくやった。良い忠実なしもべだ。」(マタイ25：21, 23)と言っていただけでしょ

うか？今日、私たちは、Ⅰペテロ1：13-21を通して「神がどのようなことを私たちクリスチャンたちに望んでおられるのか？」ということを見て行きたいと思います。そうすることによって、私たちが本来目を向けるべき方向が益々明確になり、皆さんがより価値のある生涯を送ってくださることを願います。

☆神があなたに対して望んでおられる三つのこととは？

Ⅰ. 再臨を待ち望む 13節

神があなたに望んでおられることの第1番目は、あなたが再臨を待ち望む者となることです。いつかイエスに直接、お会いできるその日が来ることを心待ちにしていなさいということです。13節「**ですから、あなたがたは、心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現われのときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。**」、ここに「現われ」とありますが、これは原語の通りで、いつか、私たちが天に行った時に、イエスに「お会いできる」というものではなく、「イエスご自身が来てくださる、迎えに来てくださる」という意味が含まれることばです。ということは、これは私たちが死後に神のもとに行って、イエスにお会いできるというようなことを話しているのではなく、明らかに「再臨」のことについてペテロは語っているということが分かるのです。

●再臨

皆さんもよくご存じの通り、聖書には2種類の再臨に関する教えがあります。(1)空中再臨＝空中までイエスが私たちを迎えに来てくださり、信者が一挙に天まで引き上げられるというもの(Ⅰテサロニケ4：13-17)。(2)地上再臨＝その空中再臨の後7年間の患難時代が来る訳ですが、その後、イエスと空中再臨で挙げられた信者たちが地上に降り立って(例：ゼカリヤ14：4-5、マタイ24、25章；Ⅰテサロニケ3：13など)、その後、地上に千年王国を築かれるというものです。ここで、私たちが覚えるべきことは、天地万物、そのすべてのものの創造主であり、救い主でもあり、唯一の完全な主権者でもあるお方が、わざわざ、私たちのために来てくださるということです。本来なら、すべての者に仕えられるべきお方、私たちの側で何かをしなければいけない、そのようなお方が、私たちを迎えに来てくださるということです。13節は「**ですから**」ということばで始まっています。その前の文脈を見ると、ずっと「救いについて」教えられています。10節には「**この救いについては、あなたがたに対する恵みについて預言した(旧約の)預言者たちも、熱心に尋ね、細かく調べました。**」とありますが、この「**あなたがた**」は誰を指しているのでしょうか？これは「私たち異邦人クリスチャン」です。そして、12節「**彼らは、それらのこと(＝11節に書かれてある、救い主の受難と栄光)が、自分たちのためではなく、あなたがたのための奉仕であるとの啓示を受けました。そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。それは御使いたちもはっきり見たいと願っていることなのです。**」とあるように、イエスがあのむごい十字架に磔にされたのは、神のことを多少は知っていた契約の民イスラエル人のためであったというよりも、神のことをほとんど知らず永遠の滅びに向かっていた、私たち異邦人のためであったとペテロは訴えるのです。こんなすごい恵みに与っているのだからと。言い換えれば、そこまで、神であるイエスに愛されているのだから「**イエスさまがお迎えに来てくださることを心待ちにしていなさい!**」と、ペテロは教えるのです。

●再臨を待つべき態度とは？

さて、ここでペテロは、私たちクリスチャンに対して、ただ、イエスの再臨を楽しみにしていない

さいとは教えていません。どのような態度で待つべきなのかということについて教えてくれています。

(1)「心を引き締め」＝目的実行のために心をシェイプアップすること

「心を引き締め」とは、直訳すると「心の腰の帯をしっかりと締めなさい」という意味です。この当時の人たちが来ていたダブついた服にしっかりとベルトを締めなさいというのです。そうすることによって、動きやすくなり、仕事やし易くなるのです。ペテロが教えるのは、「心の中のダブついた、余計な思いを、目的実行のために取り除きなさい」ということです。心のシェイプアップのことです。私たちは、神をあがめ、神を証しするために救われ、そのために今も生かされているのです。そのために、不必要な思いや戸惑い、神への不信感、この世や罪に対する誘惑、そのようなものをしっかりと、今、引き締めておきなさいと言うのです。皆さんはいかがでしょうか？皆さんの時間、関心、目的、趣味、そういったものはすべて神に喜ばれているのでしょうか？もしかすると、それは私たちに与えられている「神を礼拝する、証しするという目的」の障害とはなっていないでしょうか？それを考え直す必要があるのです。

(2)「身を慎み」＝分別をもって言い訳をしないで正しく生きていくこと

「身を慎み」ということばの基本的な意味は、「正気である」「しらふである」「飲酒を慎む」ということです。つまり、お酒に酔っていない、冷静かつ落ち着いている状況を指し、実際にお酒に酔ってしまうことはもちろんですが、酔っている時のように、物事を深く考えられなくなるようなことを警戒して、いつも、しっかりと冷静に、知性を用いて、分別をもって行動しなさいということなのです。最近の風潮であるような、自分自身の欲望に振り回されたり、感情に支配されたりして、後々、後悔してしまうような行動を起こすのではなく、いつも冷静沈着でいなさいということです。私たちは自分自身の欲も感情もコントロールできるし、そうすべきです。しかし実際には、多くの人たちが、自分の欲や感情、そして、罪に支配されてしまっています。そのようなところに神からの祝福はありません。一時的な満足はあっても、みじめな結果、後悔が残るだけです。私たちはすぐに自分自身を正当化しようとします。ちょうど、罪を犯したばかりのアダムやエバのように、すぐに言い訳をして、「そうしたくてもできない」などと言います。しかし、私たちに必要なことは、どのような事情があろうと、問題があろうと、言い訳しないで、「できるだけ神様に従っていこう」とする態度です。なぜなら、神はその人以上に、その人の置かれている状況やその人の弱さや問題をご存じだからです。問題は神の助けを頂きつつ、「できる限りやっτείこう」とするかどうかなのです。

(3)「ひたすら待ち望みなさい」＝熱心さが求められている

「ひたすら待ち望みなさい」を直訳すると、「完全に（徹底的に）、待ち望みなさい」というような感じです。特に、熱心さ（神への信頼）が求められていると考えるべきでしょう。この「ひたすら」と訳されていることばは「欠ける部分がない」という意味があって、神の約束に対する完全な信頼を表わしています。簡単に言うと「疑うな」ということです。というのは、神はこれまでも真実なお方で、私たちに約束されたことを確実に成してくださったからです。例えば、現イスラエルの再興などが良い例です。現実的に考えれば、絶対不可能なこと（北王国のアッシリア捕囚・BC721年、南王国のバビロン捕囚・BC597年）が預言されていたのが、それが、1948年に成就した訳です。しかし、何といたっても最も驚くべきことは、救い主イエスに関する預言です。ダビデの家系、ベツレヘムに生まれるなど、旧約聖書には、救い主に関する預言が300以上あるといわれます。神の預言、約束は必ず全うされます。私たちは確実に神の前に立つ時が来るのです。その日その時、あなたはクリスチャンになってから神に会うまでの間、どのように生きてきたかが評価されるのです。その時になってから、「しまった！」では遅いのです。ペテロはそうならないように、いや、神はあなたにそのように教え、何度も警告を与えることによって、あなたが変わることを願っておられるのです。私たちがこの神に対する信頼を増し加えるかどうかで、また、みことばを一つ一つ実践していくかどうかで、私たちの天での宝の量（マタイ 6:20；19:21）が変わるとともに、あなたの現在がよりすばらしい、祝福されたものになるのです。

この13節を注意深く観察すると、厳密には「再臨を待ち望みなさい」とは教えられていないことに気付きます。「…あなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。」とありますが、つまり、ここでペテロが教えていることは、「再臨の時に与えられる恵みに焦点を据えて待ち望みなさい」ということなのです。イエスとお会いできるその時、私たちに何が与えられるのでしょうか？永遠のいのち、罪からの完全な解放、神との完全な交わりの回復などです。それ以外にもありますが、いずれにせよ、それらはすべて「恵み」であり、本来なら、私たちは何一つ頂けるようなものではなかったのです。ある信仰者がこのようなことばを残したそうです。「神様は、私たちを救うために、全てを捧げてくださった。それなのに、どうしてあなたは、その神様のために、捧げることをためらうのか？」

と、あなたはいかがでしょうか？この神に期待して、神だけを愛して、そして、この神だけに従って生きて行こうと思われませんか？私たちは神が私に期待しておられること、命じておられることを実践して行きたいものです。

II. 食欲に成長を願う者となる 14－16節

さて、神が私たちに望んでおられることの第2番目、それは、私たちが食欲に自分自身の成長を願う者となるということです。間違いなく、神は私たちの神に対する従順さにおいて、また、その聖さにおいて、成長して行くことを願っておられます。14－16節「**従順な子どもとなり、以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず、：15 あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい。：16 それは、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。』と書いてあるからです。』**

● 私たちの目標は、どこにあるべきでしょうか？

神の合格点であり完全です。「**従順な子どもとなり…**」とありますが、確かに、かつての私たちはエペソ2：3が教えるように、「不従順」であり、本来なら「**生まれながら御怒りを受けるべき子ら**」でした。しかし、今は違います、そのエペソ2：3でも、「**かつては…**」とか、「**生まれながら御怒りを受けるべき子らでした**」と過去形で語られているように、私たちはもう既に、神の御力によって変えられたのです。確かに、このみことばが教えていないように「完全な者となった」訳ではありません。しかし、私たちは「**従順な子どものように**」生きて行こうとするし、そのように命じられているのです。ある意味、もう完全に「**従順な子ども**」に変えられたのなら、このように命じられる必要はありません。なぜなら、完全に「**従順な子ども**」とされたのなら、命じられなくてもそのように生きて行くはずだからです。完全に従順な者に変えられていなくても、そのように命じられているということは、「完全を目指して、しっかりと高い目標を据えて歩んで行きなさい」ということです。「こんなこと自分にはできない、とても無理です、できっこありません」ではなく、あきらめずに進んで行きなさいということなのです。なぜなら、15節には「**あなたがたを召してくださった聖なる方にならって**」とあり、16節には「**わたしが聖であるから…**」とありますが、これはどなたのことでしょうか？神です。神を模範として、神に倣って、神の聖さを目標にしなければとみことばは教えるからです。

しかも、それは15節にあるように「**あらゆる行ない**」においてそのようでありなさいと言われるのです。ここで大切なことは、可能か可能でないかではありません。有り得るか、有り得ないかという問題でもないのです。あなたの目標がどこにあるのかということなのです。だから、パウロもこのように教えています。ピリピ3：12「**私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。**」と。パウロも当然、私たちと同じ「罪を赦された罪人」です。完全にされた訳ではありませんが、彼の目標はあくまでも完全でした。言い換えると、彼が決してしなかったことは「自分で自分に合格点を与えるということ」です。周りの人はパウロに「あなたはすばらしい信仰者です。私はあなたのようになることが目標です。」と言ったかもしれません。確かに彼は、みことばの中でも何度か「自分を模範にするように」勧めています。パウロは、決して自分に対して「もう十分だから、もう、これ以上は頑張らなくても良い、成長しなくても良い」とは言いませんでした。そのようなパウロの目標は神様の合格点であり、完全であったのです。それはパウロだけでなく、私たちもそうあるべきなのです。イエスもマタイ5：48で「**だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。**」と教えてくださっています。また、ヨハネ13：15でも「**わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。**」と話され、弟子たちがお互いに足を洗い合うように、つまり、謙遜になるように勧められました。この謙遜というただ一つだけでも、私たちは完全になれるのでしょうか？無理です。なぜなら「すべての罪の根源には高ぶりがある」と言われる程に、罪と謙遜とは相反するものだからです。しかし、ここでイエスも勧めておられるように、私たちの目標は神の合格点であり完全であるべきなのです。

● 「無知」ということばの意味することは？

この14節でペテロは興味深い表現をしています。「**以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず…**」と、かつての私たちは自分の欲望を満たすことを目標に生きていました。自分のしたいように、自分の目標が満たされるように、自分の欲が満足するように…、そうすれば、自分は幸せになる、そうすることが、自分に与えられた使命であり、自分の生きる目的であるかのように思っていました。そのことをペテロはここで「**無知**」と表現しているのです。なぜなら、神は私たちにもうすでに教えてくださっているからです。あなたを造り、あなたにいのちを与えた神がいること、その神はあなたを、いや、すべての人を、目的を持って造られたということ。実は、ここで「無知」と訳

されていることばは新約聖書では4回使われています（使徒3：17；17：30；エペソ4：18；Iペテロ1：14）。その中の一つ、エペソ4：18を見てください。「**彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。**」と、つまり、救いには遠い、救われていないと言っています。パウロはここで、彼らが救われていない理由を説明しています。（1）知性において無知であることと（2）かたくなな心です。パウロは言います。人が救われないのは、神がその人を救ってくださらないからではない、その人が救いを拒んでいるからだ。「かたくなな心」とはその人自身が聞こうとしない、受け入れようとしないということです。その人の選択です。しかし、「知性＝無知」に関してはどうでしょう？「知識に関してはどうしようもない。その人は知らなかったのだから、努力ではどうなるものでもない」と、ある人はこのように言われるかも知れません。でも、ここで「無知」と訳されているギリシヤ語は「怠慢」とも訳せることばなのです。日本語でも知識の無い人のことをむやみに「無知」とは言いません。それは、ある種の軽蔑とか、あざけりの意味があるからです。けれども、これはその人が最低限の努力を惜しまなかったなら知ることができたのに、それを怠ったからその知識が無いというような意味が含まれているのかも知れません。みことばははっきりと、神は明らかにご自分を示しておられると教えています。それにも関わらず、人が神に対して心を開こうとしないのです。ローマ1：21「**というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。**」とあります。同じ28節には「**また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。**」とあります。人が神に対してかたくなになればなるほど、益々その人はかたくなになります。丁度、痛めつけられた皮膚が段々、硬くなっていくように。ローマ2：5－6には「**5ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。6神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。』**」と教えられている通りです。

欲望には際限がありません。終わりがなく満足するということがないのです。これが満たされれば次はこれ、となることを私たちは知っています。だから、ペテロはここで「欲望」ということばを使って「完全を目指す」ということと対比させているのです。つまり、かつての私たちが欲望に対して際限が無かったように、決して満足することがなかったように、神によって変えられた私たちは、成長ということにおいて、途中で満足してしまうのではなく食欲であり続けなさいとペテロは教えるのです。あなたはもっともっと成長できるのです。神の導きによってより成熟した信仰者、人間になることができるのです。完全を目指してください。常に上を目指してください。成長することを止めないでください。それこそが神のみこころなのです。

Ⅲ. 神を意識して生きて行く 17－21節

神が私たちに望んでおられることの第3番目は、私たちがしっかりと神を意識して生きて行くということです。17－21節「**また、人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごしなさい。18ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはならず、19傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。20キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現われてくださいました。21あなたがたは、死者の中からこのキリストをよみがえらせて彼に栄光を与えられた神を、キリストによって信じる人々です。このようにして、あなたがたの信仰と希望は神にかかっているのです。**」

●「恐れかしこんで」の意味とは？

まず17節にある「また」というのは、これから語ることが別のアプローチではあっても、これまでと関連のあることを表わしています。その後「**人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら…**」とありますが、これは、明らかに神のことなのに、なぜこのような回りくどい表現をしたのでしょうか？それは「神のこの働きに注目して自らの戒めとしなさい」ということです。私たちの信じている神とは「**人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方**」なのです。そして、ペテロが言うのは、だから、あなたは「**恐れかしこんで過ごしなさい**」ということです。この「**恐れかしこんで**」とは、神に対する恐れのことです。神に対して恐怖の念を抱きなさいということではありません。神に対する愛や尊敬のゆえの恐れのことです。神を心から愛し尊敬しているが故に、神を悲しませたり失望させたりしたくないのです。みことばが教える父親とはそのような存在です。確かに、父親には神から「家庭を治める」という権威が与えられていますが、だからと言って、横暴に、力で子どもたちを押さえつけて教育するようには教えられていません。愛をもって教え、戒めることが必要であ

り（エペソ 6：4）、良き模範であるから、なお、子どもたちからも愛され、尊敬を受けるのです（出エジプト記 20：12）。その一つの根拠が、この 17 節前半の「人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら…」ということです。つまり、えこひいきなく正しいルールに基づいてさばくということです。私たちの天の父なる神は、あなたを正しく見ておられ、正しいルールに基づいてさばかれます。だから、私たちは神を恐れかしこむのです。神が私たちをご覧になって悲しまれることがないように。そして、「人をそれぞれのわざに従って…」とあるように、神のさばきは自分だけに下るものではありません。すべての人が神の法のもとにさばかれるのです。

だから、私たちはむやみに恐れる必要はないのです。実は、このペテロの手紙を最初に受け取ったクリスチャンたちは、未信者をみだりに恐れる危険性がありました。未信者からのいわれのない迫害を受けていたからです。だから、I ペテロ 2：12 で「異邦人の中にあつて、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行ないを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。」というような内容や、I ペテロ 4：4 でも「彼らは、あなたがたが自分たちといっしょに度を過ぎた放蕩に走らないので不思議に思い、また悪口を言います。」とあるのです。ここで「悪口を言います」という時制は現在形の分詞が使われているのですが、これは、当時、そういった非難や中傷がなされていたことを考えられます。何度も言うように、信仰者が正しく生きようとする時、旧約の時代であろうといつの時代であろうと、どの地域であろうと迫害があります。それは、みことばに約束されている通りです（II テモテ 3：12）。確かに、迫害される時、私たちは苦しいです。私たちの心は叫びます、「どうして、私がこんな目に遭わないといけないのですか！」と。私たちの肉体は、一刻も早くそこから逃れようとします。しかし、そんな時に私たちは神の目を意識すべきです。いや、そんな苦しい状況だからこそ、神に目を向けないといけないのです。そこで悪をもってその迫害者を打ち負かしたり、正しくないことでその状況や問題から逃れたりするのではなく、神の前に正しいことをなし続けることに、その信仰を、思いを集中すべきなのです、忍耐をもって。ここで、ペテロがその忍耐を働かせる期間を「地上にしばらくとどまっている間」と表現しています。私たちに与えられている永遠と比較すると、この地上での何十年などほんの「しばらく」の間です。そのことが、イエスが私たちをお迎えに来てくださった時に現実となるのです。

●私たちが目を向けるべきもの

それは、イエスの犠牲でありイエスの模範です。18 節以降も、ペテロは私たちがしっかりと目を向けるべきこと、意識すべきものを教えています。それはイエスです。イエスが捧げてくださった犠牲であり、イエスご自身の模範です。私たちが、罪から、永遠の罪のさばきから、滅びから救われたのは、18 節「銀や金のような」、この世のものの力ではありませんでした。19 節「傷も汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血」のゆえです。それによって、私たちは「先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出された」のです。私たちが、その昔、信仰を持つ前の人生は、文字通り「むなしい」ものでした。ここで「むなしい」と訳されていることばは「空虚な」とか「中身がない」という意味をもつことばです。確かに、過去の私たちが教えられてきた生き方はむなしいものでした。後に何にも残らないからです。どれほど、この地上で面白おかしく暮らしたとしても、この世で富や名誉を築いたとしても、歴史に名前を残したとしても、それらはむなしいのです。みことばは何と教えているでしょう？ イエスはマタイ 24：35 で「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」と教えておられます。どれほどこの地上で大きなことを成し遂げたとしても、偉大なものを残したとしても、それらは永遠という観点から見た時何の意味もないのです。

だから、ペテロは私たちに勧めているのです。17 節で「人を見てはならない、問題を見てはならない、すべてをご存じで、さばき主であられる神だけを見なさい！」と。18 節では「銀や金のようなこの世の財産も、永遠から見た時何の価値も力も無い。ただ、神であるキリストを見よ！」これがペテロのメッセージではないでしょうか？

少し前に、ある方とお話ししていたのですが、「どうして、旧約のすばらしい信仰者の多くは墮落してしまったのでしょうか？」と、皆さんはどのようにお考えになりますか？例えば、ダビデやソロモン王です。あれほど神から愛され、必要な物を与えられていた偉大な信仰者たちが、どうして私たちが予想しないような墮落をし、多くの罪を犯してしまったのでしょうか？私が思うのは「彼らが得た地位や名誉、財産、そのようなものが彼らの誘惑や、高ぶりの原因になったのではないか」ということです。聖書でも、I テモテ 6：10 に「金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました」とあり、マタイ 6：21 には「あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。」ともあります。同じ 24 節には「あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」とイエスも言われています。つまり、

このようなみことばや、ダビデ王やソロモン王の実例が私たちに教えてくれることは、富や財産もそうですが、私たちの思い通りにことが運ぶことが、必ずしも私たちを成長させ、罪から、また、様々な誘惑から私たちを守ってくれるとは限らない、いや、それ以上に、それらは私たちにとって大きな誘惑となるのではないのでしょうか？

この、救い主、イエス・キリストは、コロサイ 1：16－17によると、すべてのものの創造者であります。そして、すべてのものの存在の原因でもあります。私たちは皆、このキリストによって造られ、キリストのために存在しているのです（I コリント 6：19－20；10：31）。そのようなキリスト自らがこの世に現われてくださったのです。何のためにでしょう？ペテロが教えるように、20節「あなたがたのために」です。もし、私たちに救いが必要ないなら、イエスはわざわざこの地上に来られることはなかったのです。しかし、イエスは来てくださった！それは、あなたを愛し、あなたを救うためだったのです。私たちは皆、このキリストと、このキリストを死からよみがえらせてくださった神を信じているのです。私たちの信じるイエスのメッセージがどうして本物だと分かるのでしょうか？その根拠が「十字架の死と復活」です。間違いなく、イエスが語られたメッセージは本物です。イエスこそ真の神です。だから、私たちは常にこの神を意識して生きていかなければならないのです。

詩篇 86：14には「**神よ。高ぶる者どもは私に逆らって立ち、横暴な者の群れは私のいのちを求めます。彼らは、あなたを自分の前に置いていません。**」とあり、また、54：3にも「**見知らぬ者たちが、私に立ち向かい、横暴な者たちが私のいのちを求めます。彼らは自分の前に神を置いていないからです。セラ**」とあります。皆さんは、この神の栄光を現わすために今日も生かされているのです。確かに、この世は益々神から遠ざかって行きます。だからこそ、私たちはそのような中にあっても、常に神を意識し、神を見上げて生きて行かなければならないのです。そして、この神の望んでおられる生き方をしようとするあなたを、神は必ず祝福し、助けてくださいます。